



場を開くことで場の本質が磨かれる

「お寺は外からこう見える ～浄土真宗編～」

本日はお招きいただきありがとうございます。宿坊研究会代表堀内克彦と申します。これから、同朋会館さんが研修施設として五十年が経ち、これからさらにそれを発展させていこうという中で、今まで関りのなかった方も同朋会館に来ていただいて、さらにお寺の良さや同朋会館の生活を体験しながら味わい、それを色々な方に展開していこうというお話しをお聞きしましたので、今回は私が、外から見たお寺とはどういう場所かということをお伝えさせていただきます。本日は公開研修会ということで、基本的には僧侶の方よりの話になってくるかと思いますが、一般の方にも広くお寺を考えるきっかけになればと考えております。

「お寺は外からこう見える～浄土真宗編～」。私（外）から見た浄土真宗とはどんなところなのか、そして、浄土真宗のお寺に人が入るとしたら、どんな形なら入りやすいのかといったことをお話しさせていただきます。

私は、お寺の楽しさをもっと共有しよう、お寺は人生の支えになると考えていて、広く一般の方が入りやすい形にならないかと、お寺の方と企画を作ったり、自ら情報発信をしています。

私の活動は、お寺を最初に見て歩いて、仲間を巻き込んで、そこで繋がることからスタートしています。今、まさしく同朋会館さんが思い描いていることの個人版のような形でスタートした感があるので、本日呼んでいただけたのかなと思っています。

もともと、私は親戚や友人にお寺の知り合いがいたというわけではなく、いたってお寺とは縁のない生活を送ってきました。しかし、今は寺社コンやお寺の方の前で講演させていただく関係で、年に千人以上の方とお話する機会があります。その中で、「お寺ってこういうところがいいよね」とか、「お寺ってこういうところが入り辛いよね」という意見を聞いたり、私自身が感じたりするところがあります。本日はそれを中心にお話させていただきます。

この同朋会館さんでお話しするにあたり、奉仕団が今まで五十年間続いてきた歴史や、教えを

伝えたいという思い、真宗大谷派の本山という中で、全国の大谷派のお寺の方に来ていただきたい、その中でお寺の文化をしっかりと伝えていきたいということがあるのだと感じています。一方、この同朋会館さんは、お寺に今まで縁のなかった人がお寺に入る「接点」の役割を持つべきではないかということが議論に上がっているとお聞きしております。私はこの二つは相反するものではなくて、両輪のように二つ合わさって、相乗効果で盛り上がっていくものであると思っています。お聞きしたところによると、現在同朋会館さんに来られる大谷派のお寺さんは、全寺院の一割程と伺っています。では、残りの九割の寺院にもっと来て欲しいと考えた時に、その九割のお寺だけに情報発信しても、それは可能でしょうか？ 多分、難しいでしょう。しかし外の人達で「東本願寺にこんなところがあるのか」「こんなことができるのか」「おもしろそうだな」と話題になると、今度は中の人も「外で話題になっている」と気になってきますし、そこから注目されていったりします。外の人達を巻き込むことによって、中の人達も意識が向いてくるし、逆に中の人達（関係者）にお越しいただきたいという思いを受け継ぐことによって、また外の人達にとっても同朋会館が魅力的な場所になってくる。外と中とを両輪で組み合わせることによって、さらに素晴らしい場所になっていくと考えています。

【私が抱える浄土真宗のイメージ】

前置きが長くなりましたが、それでは、私が持っている「浄土真宗のイメージ」ということで、私が外から見た浄土真宗の勝手なイメージをお話しさせていただきます。

まず、私自身は核家族ですが、両親は新潟県出身で、祖父の家は浄土真宗の門徒です。私個人はどこかのお寺の構成要員、関係者であるわけではありませんが、本家を通じて浄土真宗の流れを汲んでいるので、浄土真宗には親しみがあり、このような場をいただいたことを有り難く思っています。

〈日本最大の宗派、お寺がいっぱい〉

浄土真宗は日本最大の宗派で、お寺がたくさんあり、お坊さんもたくさんいらっしゃいます。またそれだけではなく、私は多宗派の方が集う集まりに顔を出すことが多いのですが、浄土真宗のお坊さんは他宗の方に比べて、外の集まりに顔を出す方が多いのではないかと思います。実際多宗派の集まる会の中で、浄土真宗のお坊さんが多く出席しているという場が何度もありましたので、浄土真宗のお坊さんは活発で、どんどん外に出て行く文化があるように感じています。

〈東本願寺と西本願寺の仲が悪そう〉

つい先日も、本願寺派の方と大谷派の方と私と三人でお酒を飲む機会がありました。個人個人はいい人達で、色々なところで仲良くしています。しかし、お互いの組織の話になると、歯切れの悪さを感じます。これは、その場にいる人や、地域にもよるでしょうし、また、そうだと思う人も、全くそんなことを思わないという方もいらっしゃると思います。しかし、何度かそういう場に出くわすと、色々あるのかなと思ったりしてしまいます。私も怖いところなので、あまり深く掘り下げたりはしませんが、今回は怖いなりに感じたままをお話しさせていただきました。

〈フェイスブックでよくもめている〉

先ほども申しましたが、私自身たくさん宗派のお坊さんに知り合いがいて、フェイスブックでも五百～六百人のお坊さんにつながっています。その中で、教義の解釈や組織の話を投稿して、「それは違う」「あれはこうだ」と、揉めるという言いすぎかもしれませんが、そういうやりとりをしているのは、浄土真宗のお坊さんが圧倒的に多いです。この理由は正直私もよく分かりませんが、やはり浄土真宗の文化の中で、そういう投稿をしたくなる要素があるのかもしれないと思ったりしています。

〈禁止されているものが多い〉

浄土真宗は、お守り・御朱印・祈祷・修行、すべてNGです。もちろんそれが浄土真宗の教えですから、その意義をしっかりと説いていくことは大切だと思っています。ただ一方で、門徒でない外の人達に対して、例えばお守りを持つということを頭ごなしに否定しすぎると逆に反感を覚えますし、「真宗のお寺は何だか怖いな」と感じてしまいます。もちろん、教えは教えとして大切なのですが、例えば、人がお守りなどを持つ思いや気持ちを大切に汲みとってあげて欲しいと考えています。

〈活動的なお坊さんが多い〉

先ほどお話したことの続きのような感じですが、色々な浄土真宗のお坊さんが活躍されています。活動的な浄土真宗のお坊さんをご紹介しようと思うと、何人もの方を思い出すことができます。数で言うと、他宗派に比べると多いなと感じています（講演では八人を紹介）。

ということで、私の浄土真宗に対するイメージとして、良いものや、疑問に思っていることなどをお話しさせて頂きました。しかし、そもそも宗派の区別がつく方は、世間では少数派です。もっと言えば、お寺と神社の区別がつかない方も、決して少なくはありません。ですから、本日のテーマにも入っていきますが、「開かれたお寺とは何か」ということをお話したいと思います。

【開かれたお寺とは何か】

一般の方を受け入れるお寺とはどういう場所なのか。この問いは、（すでに開いていると思っ
ている）お寺の側から考えれば、見当違いな問いでしょう。ここは敢えて、お寺の外にいる私達
から見た要望・思いとしてお伝えさせていただきます。

まず、お寺は社会に存在するものとして、そもそも認識されていないかもしれません。私が行
っている宿坊散策会（寺社好きのサークル）や寺社コン（寺社が好きな男女の縁結び企画）とい
うイベントに参加される方は、世間から見るとお寺好きの方が多いのですが、そういう方々です
ら、お坊さんと話したことがないという方が大多数です。お坊さんと話す機会はなかなかありま
せん。機会があるとすればお葬式が多いと思いますが、それも後ろで座ってお経を聞いているだ
けで終わりということが多いので、お坊さんと話す機会があると、大変喜ばれます。実際に私も
活動の中で、お坊さんに声をかけて、参加者とお坊さんの話す時間を設けると、皆さんすごく質
問をされたりしています。ですから、お寺と社会の接点の少なさは非常に強く感じています。お
寺に興味のある人ですらそのような状況なので、お寺に興味のない人は、お寺という単語は知っ
ていても、そもそもお寺というものが社会の中の構成要素として頭に入っていないのではないかと
思います。

【お寺を開く意味は何か】

では、お寺を開く意味は何か。一般の人達には、そもそもお寺というものが頭の中に認識され
ていない。では、認識していただくためにはどうすればいいのでしょうか。これはお寺が社会を
良くしていく活動を通して、人と交わっていくことだと考えています。逆にそれがなかったら、
単なる押し付けになってしまうでしょう。一般の人達がどんな事を思い、悩んでいるのか、何を
求めているのか。それに応えていくというのが、外と交わることの大切な点なのだと思います。

ちなみに一般の私達にとっての「より良い社会」とは、決して仏教が広く信仰されることでは
ありません。経済が安定して仕事を得られることや、年間三万人と言われる自殺者が少なくなる

こと、豊かな自然環境が守られることや、家族が笑っていられること等、人それぞれに「より良い社会」の定義はありますが、幸せに生きられる環境というのが「より良い社会」なのではないかと思っています。

ですから、これからのお寺がとるべき道として、お坊さんには、人が幸せに生きられる社会作りに突き進んで欲しいと考えています。そしてそれは、仏教を広めることよりも優先順位を上げて欲しいです。これは、お坊さんからしたら、仏教を広めることこそ大切なのだと思われる方もいらっしゃるでしょうし、もちろんそれはお寺の大切な役割だとも思っています。ですが、まず仏教を広めることから入ってしまうと一般の人は抵抗を感じますし、逃げてしまって距離をおかれてしまうこともあるでしょう。それは、稼ぐことよりも人を幸せにすることに理念を置いた企業が、結果的に収益を上げ継続していくという話にも通じます。仏教と直接結びつかないところでも親身になって助けてくれたり、頑張っている姿が見えたり、そういうお寺に皆惹かれていきます。ですから、お寺と社会にそういう関係が作られたらいいのではないかと私は考えています。

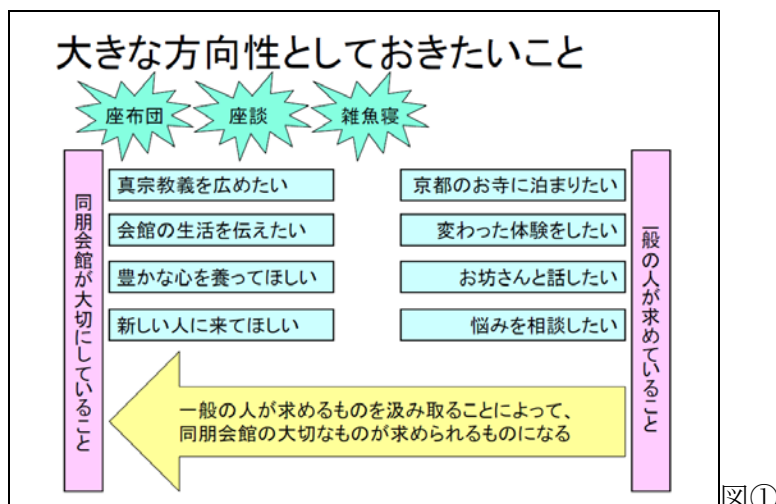
【お寺を開く5つの方策】

- 1 全体像を俯瞰する
- 2 外の人々の立場に立つ
- 3 入り口を作る
- 4 人を呼び込む
- 5 外と中を結びつける

それでは、今までの話を元にしながら、「お寺を開く5つの方策」についてお話しをさせていただきます。

まずは、全体像、中の人達と外の人達との関係図を見ていきます。続いて、外にいる人がお寺をどんなふうに見ているかを考えていただきます。外の視点を作ったところで、入口を作る。その作った入口に人を呼び込む。そして、最後の段階で、やっと自分達が伝えたい部分を外と結びつける。回りくどいかもしれませんが、こういうやり方が、順序を踏んで、外の人を中に呼び込む手順になるかなと考えています。

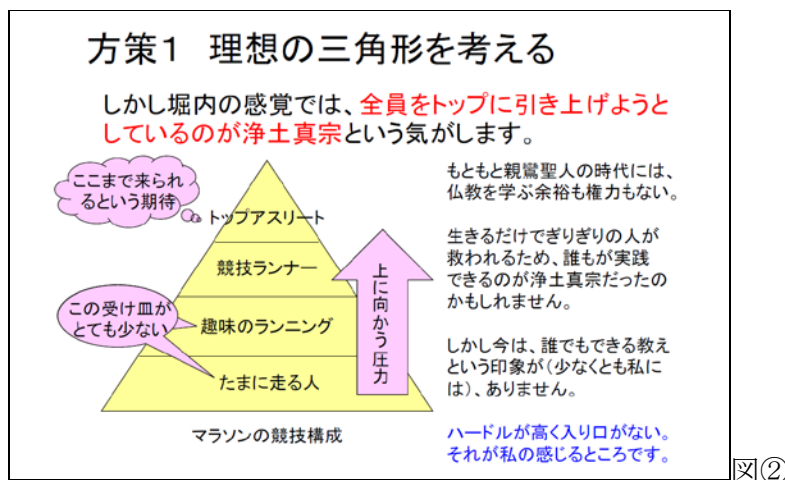
それでは、この手順の中で大きな方向性としておきたいことについて、まずはお話しさせていただきます。今まで語ってきたことと同じですが、それを図（図①）にしてみました。



「同朋会館が大切にしていること」ということで、「真宗の教義を広めたい」、「この会館での生活」、特にこの同朋会館では「座布団」「座談」「雑魚寝」といった、人と人が話し合うということをととても大切にされているとお聞きしました。ですから、その生活を伝えたいということも大きくあると思います。その生活を通してかもしれませんが、「豊かな心を養って欲しい」とか、「新しい人に来てほしい」ということが、今同朋会館さんが大切にしていることなのではないかと思っています。

一方で、一般の人が求めているものは、「京都のお寺に泊まりたい」「変わった体験をしたい」「お坊さんと話したい」「悩みを相談したい」といったものがあります。この方向性として考えておきたいことですが、一般の人が求めるものを汲み取ることによって、この同朋会館さんの大切なものも、一般の人から求められるようになります。同朋会館側だけを大切にしているだけでもだめですし、一般の人が求めていることだけを大切にしているだけでもだめです。この二つを大切にすることによって、一般の方の思いを汲み取りながら、同朋会館に結び付けていくという流れが必要だと考えています。

〈方策1～全体像を俯瞰する～ 理想の三角形を考える〉



それでは、方策1ということで、全体像を俯瞰するために、理想の三角形を考えるというお話をさせていただきます。理想の三角形とは何か、マラソンに例えてみましょう。

マラソンに例えますと、だれもが四二、一九五kmを二時間で走りたいと思っているわけではありません。図②の三角形の一番上は、トップアスリート。オリンピックに出たり、記録を狙うアスリート達です。その下が、競技ランナーです。マラソンで三時間を切るタイムで走る人を「サブスリー」と呼びますが、それを目標とするランナーがいるような層のことです。続いて、趣味で走る方。ランニングサークルに入っていたり、フルマラソンではなくハーフマラソンで走ってみようという方達です。その下に、たまに気が向いたら走ってみようという人達があります。

マラソンに例えましたが、他のどんなものであれ、生活にどの程度のレベルで取り入れるかには、人それぞれ差があります。三角形の各層ごとに満足することは違いますし、下の方に無理に上を目指させないことも必要なのではないかと思っています。金メダルを取ろうと思うと厳しいトレーニングをしたり、食事に気を使ったり、健康管理をしたり、さらに言えば働き方も変わってくるでしょう。健康やダイエット目的で走る人とは、正しい走り方も異なってきます。ですから、頂点のみの論理では、裾野にいる人は逃げていってしまいます。「さあ、あなた、明日から四二、一九五kmをまずは三時間くらいで走ることを目指してやりましょう」なんて言われたら、「いや、

それはいいです」と皆さんなるでしょう。

私は、全員をトップに引き上げようとしているのが浄土真宗なのではないかと感じています。他の宗派に比べて、そもそも浄土真宗はそういう教えなのかなとも思ったりしています。僧侶も一般の方も同じ立ち位置で仏様に向き合うというか、そういう部分があるのではないかと思います。

法然さんから始まって、親鸞さんのところに、仏教を学ぶ余裕も、財力も権力もない、そういう今まで仏教から取り残されていたような人達が入ってきたのが、浄土真宗だったのではないかと思います。しかし、今の時代を見た時に、浄土真宗にはすごく入り辛く感じていました。つまり、この三角形の一番下の受け皿がとても少ない。図には「たまに走る人」とありますが、たまに真宗のお寺に出たり入ったりという人の入れるところが少ないというのが私の感じているところです。

だからこそ、この真宗の教えや生活スタイルを、一見さんでも軽く入って見られるということを検討されようとしている、この同朋会館さんの取り組みに私はすごく期待しています。特にこの中で、お願いしたいことがあります。それは、ここに来た方々をいきなり無理に上の方へ上の方へと引き上げようとししないでくださいということです。せっかく興味を持ってきたのに、スパルタ式で上へ持っていこうとすると、やはり皆逃げていきます。すそ野はトップアスリートを支える地盤でもあります。ちょっと出たり入ったりしながら、心地よく自分の距離で触れていく。その中から、こういう教えっていいなと思えば、だんだんと上に上がっていく方もいるでしょうし、ずっと出たり入ったりしていたが、何かの転機によって、もう少しやってみようと思われる方もいると思います。もちろん出たり入ったりしていて結果的に出て行ってしまう方も大勢いるでしょうが、そういう存在を認めてあげていただけたら、すごくお寺としては入りやすくなると思います。

〈方策2～外の人々の立場に立つ～ 教会に行ってみる〉

続いて、外の人達の立場を感じていただくために、「教会に行ってみる」というお話しをします。お寺の方にお寺の敷居の高さをお話ししても、なかなかピンと来ないということがあります。お寺の方は、普段お寺に出入りしていますし、敷居が高いということを知っていたりするとは思いますが、それを本当に実感できるかということ、本当に難しいです。ではどうしたらいいかと考えた時に、教会に行ってみれば、同じことが体験できるよということが私の意見です。

お坊さんが教会に入る時、慣れていない人はドキドキします。例えば作法があるのではないかと、その作法が分からないと怒られたり笑われたりするのではないかと、それから勧誘されてしまうのではないかと、そういう不安をものすごく感じます。

実際に、私も教会に行ってみました。では、教会に行こうという時にどうするかというと、まずはホームページで教会を探します。色々なサイトを見ながら、「キリスト教の方でなくても入っていいです、どなたでも歓迎します」という教会を最初に探してみました。ただ、それでもいきなり行くのはなかなか敷居が高かったので、クラシックのコンサートが行われている日を選んで入ってみました。そういう日を選んで行ったのですが、入口まで来ると、「本当に入ってもいいのかなあ」とか、「入ったら何か言われるのではないかと」とか、そういうことを感じました。少し入り口の周りをうろろろしたり、中を覗いたりしながら、やっと入って行って、「どうぞどうぞ」と言われて、ようやくホッとしました。

やはりこういうことを体験してみると、自分のお寺などを見た時に、「この部分って、人を寄せ付けないところがあるのかな」とか、「ここにこういうものを置いたら、人が入りやすくなる

のではないか」とか、そういうことを感じるようになります。ですから、そういう感性を磨くという意味もあり、教会へ試しに行ってみることはお勧めです。

せっかくなので、教会で得た私の気付きをお話させていただきます。事前に「入っても大丈夫ですよ」ということを明確に伝えないと、人は問い合わせることさえなく去っていきます。「興味があったらいくらでもお聞きください」とか、「お気軽にご連絡ください」と書いてあるお寺はたくさんあるのですが、聞いてくる人は百人に一人くらいです。あとの九十九人は何も言わず逃げていってしまうので、出来るだけ相手の疑問や質問に先回りして答えを書いておく、明示しておくということが重要です。

続いて、イベントは人がお寺に足を運ぶ動機付けになります。ちょうど、来年一月に一般の方を対象にしたこちらの生活の宿泊体験講座（※「東本願寺に泊まって学ぶ親鸞講座」一月十七・十八日開催）が企画されていますが、やはりイベントとしてまず行われると、「入っても大丈夫なんだな」とか、「私も行けるのかな」と思われたりします。ですから、イベントを作っていくということも、新しい人を受け入れるという意味で、とても重要なポイントです。

続いて、お寺に来た人は入り口で足が止まります。スムーズに中に誘導できるしくみ作りについても真剣に考える必要があります。これも先ほどお話ししたように、私が教会の前をうろうろしていたということがありましたが、実際に教会に行った時に、入口に何も書いていなかったのです。看板は一応ありましたが、それが見えづらい場所にありました。ですから、「本当に今日だったかなあ」とか、「入っていいのかなあ」とか思いました。そういう意味で、例えばイベントの日に誘導係が入口に立って中に誘導していたり、看板で入口に「今日はこのイベントがありますので、お気軽にお入りください」と明示しておく入りやすくなります。

多分皆さんが教会に行ってみたら、それぞれの立場やしていることによって、「こういう部分があるな」とか、「こういうことができるな」とか他にも色々なことを感じるのではないかと思います。ぜひそれらを体験して、そして教会から出たらすぐにメモに書き留めて、お寺に戻ってきたら一気に変えてしまうくらいの勢いでやっていただくといいのではないかなと思います。

蛇足ですが、実際に教会に行くときは、お祈りの気持を忘れずに。これは、東本願寺さんは、ここに来たらぜひ阿弥陀様に手を合わせて欲しいと思われていると思いますが、教会もそれは同じです。イエス・キリストにお祈りして欲しいということは教会の方も思われていることですので、最低限の礼儀として大切にしていきたいと思います。

因みに、「教会にはよく行くんです」という方には、イスラム教のモスクがおすすめです。私も行って来ましたが、東京にある東京ジャーミーには、「見学はご自由です」と入口にデカデカと書いてあります。ですが、その一画だけ、髭の濃い中東系の方がたくさんおられて、いかにも日本じゃない場所に来ちゃったなという感じで、すごく勇気のいる所でした。ですが、こういう所に行ってみると、多くの気づきがあるのではと思っています。

〈方策3～入り口を作る～ 仏教を伝えることをやめる（伝えることを一歩遅らせる）〉

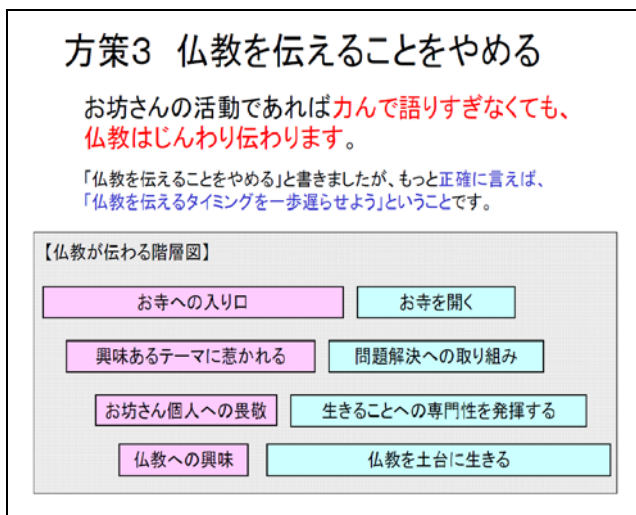
続いて、方策3「仏教を伝えることをやめる（伝えることを一歩遅らせる）」という話をさせていただきます。最初に前提として、仏教を伝えるよりも、社会をより良くする活動にもっと力を入れて欲しいということをお話ししましたが、そのことについて、もう少し細かくお話をさせていただきます。

まず、お寺は人が幸せになるための場所です。仏教を伝える場として定義するのであれば、人は離れていくでしょう。これは私の個人的な考えですが、「仏教は背中で語ればちょうど良い」と考えています。口ではなく背中で語る。もちろん、口で語ることも大切ですが、生きる姿勢と

して僧侶が仏教を伝えていく、そういう生き様を見せるということも必要なのではないかと思います。

最初に、お寺ってそもそも一般の人に認識されていないのではないかとということをお話ししましたが、仏教を伝えたいのであれば、お坊さんには仏教は良いものであるということを実証する責任があります。なぜなら、多くの方が、仏教をそもそも有用なものとして認識していないからです。仏教の良さを証明するための手順としては、まずはお坊さん自身が生きることに対する専門性を発揮していくことです。

今日本で宗教ほど売り込みを嫌われるものは他にありません。新興宗教のみならず、伝統仏教も同じです。先ほど、教会に行ってみるといってお話をしましたが、もしかしたら、なぜお坊さんが教会に行こうなんて言われるのだとむっとされた方もいらっしゃるかもしれませんし、教会に行ったら勧誘されるかもしれないと不安に思われた方もいたかもしれません。やはり、これらは一般の人達もお寺に関する人達も、理屈は同じなのです。ですから、まず仏教を伝えるよりも、仏教が良いものなのだとということをお坊さん自身の姿で感じさせる、伝えるのではなく感じさせるということが必要なのではないかと思います。そのためには困難に立ち向かって人のために力を尽くしたり、仏教を信念としている人間は違うなど、人を圧倒するような姿を見せて初めて、仏教は人に伝わっていきます。



図③

お坊さんの活動であれば、力んで語り過ぎなくても、仏教はじんわりと伝わっていきます。最初にも言ったとおり、「仏教を伝えることをやめる」と書きましたが、正確に言えば、仏教を伝えるタイミングを一步遅らせようということで、仏教が伝わる階層図というものを書いてみました(図③)。右の四角がお坊さんの取り組みや生きる姿勢、左の方が私達一般の人達の流れです。一番下、お坊さんであれば、仏教を土台に生きているでしょう。仏教とは何かと言ったら、私の勝手な考えですが、「生きる」ということを説いた教えではないかと思います。であれば、それを生活に、人生の核として取り入れている人であれば、生きることのスペシャリストでなければおかしいのではないかと考えています。

では、生きることに對するスペシャリストとは何か。専門性を持って色々な問題解決、社会の問題に取り組んでいく、そういうことが出来れば、また人とは違う結果が出るのではないのでしょうか。例えば、何かの問題にぶつかっていけば、当然トラブルが発生したり、困難が出てきます。一般の人なら挫けてしまうことでも、生きることのスペシャリストならば乗り越えていくことができる。それが、仏教ってすごいと思われる中味になります。そしてここで、問題解

決や取り組み、その手段としてお寺を開いていく。そうすることによって、一般の私達にとっては、問題解決の取り組みの手段として開かれたお寺が、入口になっていきます。その入口に入るかどうかは、興味あるテーマに惹かれるかどうかです。お坊さん達が何をしているかということです。その、色々な取り組みをそれぞれの僧侶がやっていく中で、例えば一人一テーマで何かやれば、どこかでは誰かが引っかかってくる。興味あるテーマに惹かれた中で、「このお坊さんはこんな凄いことをしている、なぜこんな大変な道を歩いているのだろう」と、お坊さん個人に対して尊敬の念を抱いたりします。それがあってやっと、私達一般の人間は、その背景にある仏教はこんな教えなんだと、感じ取ることができます。

これは本当に遠回りかもしれませんが、ぐるっと輪を描くことによって、私達一般の人間が仏教というものを感じ取れるようになります。これが、いきなり一番下で仏教を土台に生きているから、仏教を伝えようとなると、やはり一般の人を遠ざける結果となってしまいます。ぐるっと回って徐々に人を輪の中に巻き込んでいく、そういうことが出来るといいのではないのでしょうか。

〈方策4～人を呼び込む～ 知縁を結ぶ〉

先ほど「入口を作る」という話をしましたが、今度は作った入口に人を呼び込むということで、「知縁を結ぶ」というお話をさせていただきます。「知縁」とは何かというと、これは私が作った言葉で、「知識の縁、興味の縁、問題の縁」ということです。何かテーマがあり、それを核にして人と人とが結びつくということをお話しさせていただきます。

今、特にインターネットがどんどん発達していることによって、知識の縁というものが縦横無尽に張り巡らされています。今まで縁というと、例えば血縁、地縁、社縁（会社の縁）というものがあと思いますが、今急速に発達しているのが、テーマによって人が結びつくという縁です。これはインターネットで興味のあることを検索すると、それをやっている人が出てきたり、フェイスブックやツイッターなどのSNSによって、人が集まって実際に会ったりすることができます。これが今大きく広がっていますので、先ほど入口を増やすことが必要ではないかという話もしましたが、こういう知縁を作っていく、入口をたくさん作って、そこにひっかかる人が入れるようにしておくということが大切です。

これは、私が勝手に思いつくまま挙げたものですが、例えば食事についてなら、遺伝子組み換えや食料廃棄の問題。健康についてなら喫煙や乳がん、生活習慣病等。その他にも子育てや環境問題等。考えれば考えるだけ、世の中いくらかでも問題がありますし、その中で、例えば僧侶自身がおかれている環境の中で気になった問題は、人によって違うと思いますが、何かしらあると思います。実際に私も知っているお坊さんの中には、遺伝子組み換え問題に積極的に関わっている方がいらっしゃいます。実際のこういう取り組みが、仏様の教えに人を導く接点になるのかなと思っています。

ここからバリエーションを増やしていきますが、先ほどまでは分かりやすいように社会問題についてお話ししていましたが、入口は社会問題に限る必要はありません。楽しいことや、変わったこと、色々なお坊さんの個性も入口を作っていきます。同朋会館さんで言うと、例えば何かしらの問題に対する取り組みのプロジェクトだったり、色々な楽しいイベントをしたり、そういうことがお寺への入り口を作っていきます。

そこで、私はお坊さんに、セカンドスキルを持つことを提唱しています。セカンドスキルというのは、私が勝手に作った言葉です。仏教と共にプラスアルファの技術を何か一つ持つと、仏教を伝えやすくなりますということをお話ししています。

沖縄の三線という楽器を引く盲目のお坊さんがいたり、他にも私の知り合いで、料理を作っているお坊さんがいたり、ジャグリングや手品をしたり、色々なことをされて、そこから仏教についても語っていく。そんな切り口のお坊さんがたくさんいます。なので、何か専門分野をもって社会に貢献していき、それが結果的に直接仏教について語っていなかったとしても、人に仏教を伝える要素になるのではないかということで、セカンドスキルということを紹介しました。

次に、私が取り組んでいることで、寺社コン（寺社好きな男女の縁結び企画）も知縁作りとなっています。これは私がそもそもお寺や神社が好きな女性じゃないと長く付き合えないだろうなと思ったことがきっかけです。私は趣味で日常的にあちこちのお寺に行っており、趣味もお寺、仕事もお寺ということなので、お寺に興味のない方だったら付き合えないなということがあって、お寺が好きな人同士が繋がれる場作りをしようと思いました。お寺巡りが好きな人で、同じ趣味の異性が回りにいないという方は特に多いです。お寺巡りが好きなのに、何となく「旅行が好き」という感じで濁して終わらせてしまったり。あと皆で旅行に行っても、あそこのお寺に行きたかったんだけど、皆に、「またお寺なの」と言われるかなと思って、何となくショッピングに付き合っただけで終わってしまって悔しい思いをしたりとか、そんな話をたくさん聞いています。ですので、私の場合は、寺社が好きな相手と出会いたいという想いを核にしながら、お寺と人とを結びつける活動をしています。そして、そのような活動の中で実際に結婚された方もいらっしゃいます。

もう一つ、「お寺という場の力を信じること」というお話しをします。東京のとあるお寺でプロジェクトマッピングを行っているお寺があります。プロジェクトマッピングとは立体の建物に映像を投影する技術ですが、これを開発されている会社の方と知り合っただけで、除夜の鐘の時に、皆さん寒い中で待っているのだから、その間にこのプロジェクトマッピングを実際に見せたら皆喜ぶのではないかと、企画されていました。

世の中には色々な凄い技術がどんどん出てきているし、新しいものは追いきれないほど現れてきます。それを一つ一つ見つけて引っ張り込むのはとても大変なことです。ですが、逆にクリエイターや会社、個人の中に、お寺という場で何かしたいという方はたくさんいます。そういう方に思い切って開放を呼びかけると外からお寺を見つけてくれますし、お寺の入口を増やすという意味では有効です。

〈方策5～外と中を結びつける～ 小さな階段をたくさん作る〉

最後に、方策5「外と中を結びつける」というお話しをさせていただきます。ここで、自分達の伝えたいことを伝える段階に入ってくるのですが、「小さな階段をたくさん作る」というお話です。

一般の人達が求めていることを汲み取ることによって、自分達の伝えたいことに一般の人達を巻き込んでいくことができます。その巻き込む段階で役に立つのが、この小さな階段を作るというお話です。

小さな階段とは何かというと、最初にマラソンで例えた三角形の話をしてしまいましたが、一気に一番上の理論で話すのではなく、少しずつ自分達のエッセンスを伝えていく、それを体験してもらうということです。そういうところで言うと、このところ、曹洞宗が面白い企画を多く出しています。

例えば、簡単イス座禅。これの良いところは、オフィスや家の中でも出来ること、わざわざ座禅をやろうと思わなくても、ちょっとイスに座って座禅の良さを感じるということです。さらに面白かったのが、「座禅」という文字です。禅宗のお坊さんは通常、正しく「坐」という文字を使いますが、一般の人達は、「坐禅」と書く時は、大体「座禅」と書きます。意識されたのかど

うかは分かりませんが、イス座禅は「座禅」という文字を書いています。多分、本来なら「坐禅」と書きたかったのかもしれませんが、入口として考えるならこの「座禅」という文字の方が人に馴染みがあります。本当に細かなことですが、こういうことも小さな階段なのかなと思っています。

その他にも、曹洞宗のお坊さん達は色々な取り組みをされています。中には、坐禅の脳波や精神効果を大学と一緒に研究して睡眠に与える影響を研究されているようなところもあります。

もちろん、禅宗のお坊さんにも、「坐禅に何かを求めてはいけない」ということを言うお坊さんもたくさんいます。ですが、「とりあえずそこまで固いこと言わずに、まずは座ってみようよ」という段階からであれば、こういうこともいいのではないかと思います。それによって、例えば一昔前なら坐禅は罰ゲームのようなイメージだったと思いますが、今だと、坐禅は健康にいいとか、仕事にいい影響を与えるということで、スティーブ・ジョブズが有名ですが、海外では坐禅が仕事のための取り組みとしてよく行われたりしています。

こういうことには、禅宗のお坊さん達の努力があったことは言うまでもありませんが、曹洞宗は今色々面白い企画を作られています。

それから、多宗派が合同で行うイベントもあつたりします。実際に、阿字観（真言宗）、坐禅（天台宗）、念仏（浄土宗）のコラボレーションがあつたりしましたが、色々な宗派を比べるということは、知的好奇心をそそります。それぞれの宗派の特徴を感じられたり、自分に合うなど感じるものがあるかもしれません。それはやはり、実際に比べてみて、それぞれの違いに各々興味を持つことであって、他から一方的に押し付けられると、興味を持たれなくなってしまいます。ですから、色々やってみる場を設けることもおもしろいかなあとと思います。

ここで、例として挙げさせていただきますが、お焼香の作法について、浄土真宗だと「額にいただきます」と説明されたりします。しかし、お焼香は色々な宗派によって違うし、そもそもどうやっていいか分からないという人ばかりなので、「こうやってください」と言われると、すごくドキドキしてしまうのです。例えば、実際にやってみる中で、額の前に持ってきてやりましょう、次は持ってこないでやりましょうということをやってみると、こういう違いがあるのだと感じたりしますし、逆に今度は、額に持ってこない意味は何かといったことも心に入ってきたりします。

相手が求める形での情報発信も、小さな階段として機能します。私の場合は、宿坊研究会から色々発展させまして、例えば縁結びの神社についてまとめて紹介するサイトを作ったり、お守りを紹介するサイトを作ったり、宿坊研究会の英語版のサイトを作ったりしています。やはり、情報発信はすごく大切です。なるべく相手の疑問等に先回りし、相手と繋がるテーマに結びつけながら情報発信していくことによって、自分達の大切にしたい部分に興味を持たれ、実際に来てもらえる階段になっていきます。実際に私もこのサイトを作って、例えば坐禅だったら、一般的な禅宗のお坊さんよりもはるかに多くの人を坐禅体験へ導入しています。

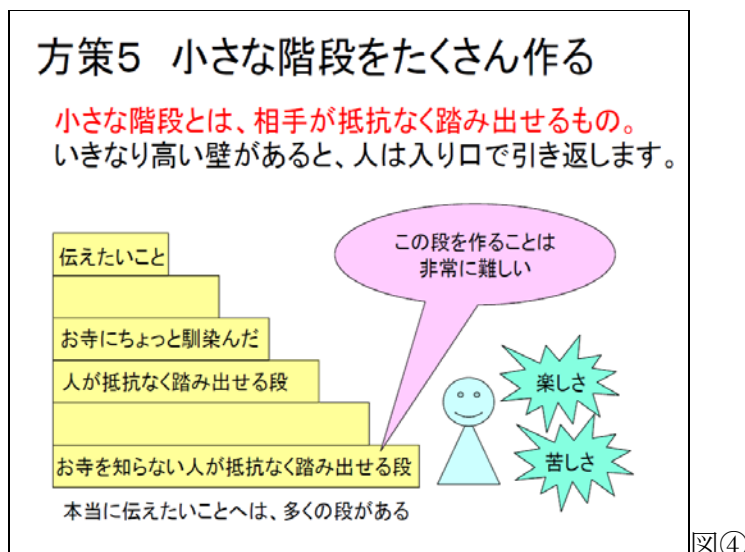
続いて、すべての言葉を仏教語以外で説明するということについてです。これは、ある意味言葉遊びみたいなのところもありますが、例えば阿弥陀様をサッカーで例えたら、音楽や料理で例えたらどうなるか。これは、例えばサッカーが好きな人に、阿弥陀様をサッカーで例えたらどうだよねとかいう話をしたら、興味を持って話を聞いてくれると思います。私が浄土真宗のお寺に来たときに感じるものの一つに、すごく独特な言葉や言い回しが多いなというものがあります。これは、聴聞を大切にされているから、聴聞の場に出てくる言葉というのが、どんどん出てくるためではないかと思っています。ただ、一般の人はそういう言葉、難しい言葉や分からない言葉に触れていくと、それだけで敷居を高く感じてしまっていますが、自分の分かる言葉で説明されるとすごく

入りやすくなったりします。「聴聞」という言葉自体お寺の外では聞かないですし、「同朋会館」もそうだと思います。「同朋」という字も、恐らく普通に読んだら「どうほう」と読まれると思います。中にいる人だったらそれが自然で、意識する以前のことだと思うのですが、こういう細かなことでも、それが外の人にとってはものすごく大きなストレスになります。ですから、時には全てを封印してみて、相手の背景にある世界で表現するというのもいかがでしょうか。言い換えをすると、必ず色々な誤解が出てきます。ですが、誤解を恐れて自分の世界の言葉だけで語ってしまうというのは、お坊さんの責任放棄なのではないかと感じております。

続いて、「ロックな般若心経やドラマチックな正信偈。私達が聞きたいお経は古文の勉強ではありません。」と、だんだんヒートアップしてきて、皆さんがどう思われているのかドキドキしながら話をし始めますが、少し前にネットで、「超スゲー楽になれる方法を知りたいか？」という言葉から始まるロックな般若心経の訳が話題になりました。

それから、『正信偈』についても、やはり、『正信偈』なんて、一般の人はまず言葉自体聞いたことがないですし、いきなりそれを教わろうとしても、遠い世界の言葉だと思うのです。ですが、苦しい人生の中にも『正信偈』を心の支えに生きている人のことを具体的に聞くと、「この人、何かすごいな」と思って、ではその支えになった『正信偈』って何だろうと、それによって遠い世界だったものがいつの間にかぐぐっと近づいてきます。そういう意味で、今『正信偈』に関して話題になっている本も実際にあります（講演では本と共に事例を紹介）。

先ほどもお話ししましたが、ぐるっと円を描いて仏教に人を連れてくるという話しと同じことです。やはり単にお経の言葉をどんどん挙げるよりも、まずそこに自分達のストーリーを作り上げるという事も大切です。



ということで、小さな階段とは、相手が抵抗なく踏み出せるものであり、いきなり高い壁があると人は入口で引き返してしまいます。図④に、「この段を作ることは非常に難しい」と書いてありますが、恐らく一般の方に登れるような小さな階段を作ろうと思ったときに、大体一番最初に思いつくことは、伝えたいことという一番上の段の一つ下あたりだと思います。外にいる方がいきなりそこに行くということは、まず無理です。逆に一番上の段あたりにいきなり来れる人というのは、すでにある程度の段まで登ってきている人です。

例えば、プロ野球選手が、野球好きの少年にバットの振り方を教えるということは、簡単に出来ます。ですが、野球が好きでもない少年にバットを握らせることは、プロ野球選手でも簡単に

出来ることではありません。サッカーに関して言うと、例えば、昔もスタープレイヤーはたくさんいましたが、日本中のサッカーが好きでもない少年にボールを蹴らせたのは、そういうスタープレイヤーではなくて、『キャプテン翼』という漫画でした。

こういう「お寺を知らない人が抵抗なく踏み出せる段」というものを作ろうとしたら、お寺の文化以外のものにも精通しないと作れないのではないかと私は思います。その時にキーワードになるのが、一般の人達が持っている楽しさや苦しさにアクセスするということです。

まとめに入っていきますが、同朋会館さんでは「座布団・座談・雑魚寝」というものをとても大切にしていってらっしゃいます。「皆で輪になって話しをしようよ」というものなのですが、これはキーワードとしてとても面白いなと思っています。例えば、皆で雑魚寝したり、持ち寄ったお米で食事をしたりということは、現代生活ではほとんどなくなっています。むしろ、そういったものが面白そうだとか、新しいと感じてもらえるのではないのでしょうか。ですから、こういう期待というものも小さな階段にしながら、中にある同朋会館さんの生活スタイルやそこで伝えたい思いを結びつけていく。そして、「座布団・座談・雑魚寝」で話す内容も、例えばこういう問題で苦しんでいる人とか、こういうことに興味がある人といったテーマを色々設定してもいいかと思っています。それが入口となって、一般の人が入りやすいところから、入って見たらいつの間にか同朋会館さんの伝えたいことにまで結びつけていく。そんな形にもなっていきます。

【可能性は無限大】

最後になりますが、私達はお寺を求めています。さらに、これからの社会において、お寺はますます大切な存在になっていきます。同朋会館さんのお風呂（※第三浴場）ですが、入浴中に話がしやすいようにこのように作られているとお聞きしましたが、丸が二つくっついていて、まさしく「無限大」の形をしています。



これまでお寺と縁のなかった人は、今まで色々話しましたとおり、門徒さん達と違って、決してお寺の論理では動いてくれない人達です。論理で動かないというよりも、そもそもお寺の論理を知りませんし、やはりそういう部分が衝突の原因になることもたくさんあると思います。ですが、最後にお伝えしたいことは、衝突するということは、何も一般の人達が悪意を持ってぶつかってくるわけではないということを感じていただきたいということです。そのくらいお寺とは未知の場所であって、皆あたふたおろおろしながらやって来るとのことです。入ってくるだけでものすごいエネルギーが必要なのです。

お寺を求める人はたくさんいます。その求める人が入りやすい入口を作っていただくことが出来たら、同朋会館さんはそういう人達の大きな受け皿になり、さらにそこから一般の人達が盛り上がることによって、元々大谷派の方がなかなか来てくれないという問題も、外からの興味によって中（宗門内）も盛り上がり、中が盛り上がればまた今度外から見ても魅力的に映って

いく。こうして大きく好循環が生み出されると思っております。

まとめとして、「理想の三角形」の全体像を考えて、それを見る。それによって全体として一番裾野にいる人達はどんな人達なのかを感じる。その人達の気持ちになってみようということで、実際に教会に行ってみる。その人達の気持ちになった時に、どんな入口がいいのかと言ったら、まず仏教をいきなりごり押しするのではなく、その人達の興味あるところから入口を作っていこうということで、「伝えることをやめる」「知縁を結ぶ」。そして、それが出来てきたら小さな階段を作りながら、同朋会館さんの伝えたい思いまで人を引きつけていく。そういった流れで、どんどんとまた新しいスタイルや今まで伝えてきたスタイルというものが上手く融合していくのではないかと感じております。

ご清聴ありがとうございました。

(終)

宿坊研究会・堀内克彦氏 プロフィール

「人生を変える寺社巡り」がテーマの寺社旅研究家。

宿坊研究会・縁結び神社研究会・お守り研究会を運営し、参加者千人を越える寺社旅サークルの主宰や宿坊サミットの開催、トークライブ、海外への日本文化情報発信、寺社好き男女の縁結び企画「寺社コン」をプロデュース。

宿坊研究会は、お寺や神社の宿泊施設「宿坊」を中心に、座禅・写経・精進料理などの寺社体験を研究&紹介している団体で、YouTubeの「スーパーおすすめサイト大賞」で審査員特別賞を受賞。姉妹サイトも合わせた月間アクセス数は、五十万ページビューを越える（<http://syukubo.com/>）。

日蓮宗のお寺活用アイデアコン。へでは、様々な寺社を活性化させた実績を買われて審査員を務め、各地で寺社活性化・地域活性化の講演なども実施。

著書に『宿坊に泊まる（小学館文庫）』『お寺に泊まろう（ブックマン社）』『恋に効く！えんむすびお守りと名所（山と溪谷社）』など。